〈高校生の部　優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞〉

出会ってくれてありがとう

福井県立三国高等学校　高山　咲輝

「他の人と考え方が違うところ」

この言葉で私の人生は変わった。

友達を作ることが苦手。理由は自己肯定感が低いから。幼い頃から、

「変わってるね」

と言われることが多かった。言っている方からすれば何気ない一言かもしれないが、私はこの言葉で深く傷つく。他人と違うことはダメなことなんだ。他人と違うことをしてしまう私はダメな人間なんだ。私という存在を否定されている気がする。他人の目ばかりが気になる。嫌われるのが怖い。そんなことを思いながら生活する日々。話しかけてくれる子はたくさんいる。でも、こんな私と話していて相手は本当に楽しいのかな。後から嫌われるくらいなら仲良くならないほうがましだ。そんなことばかり考えてしまう。結局、仲良くしようとしてくれる子とも深い関係にはなれずに終わる。こんな自分に嫌気がさし、毎晩泣く。

そんな私も気づけば高校生になっていた。憧れのＪＫ生活。今までの自分を変えようと、積極的にみんなに話しかけてみる。しかし、なかなか上手くいかないのが現実。

「やっぱり私なんか……」

と思い落ち込む日々。それでも、高校では嫌われないようにしようと、必死で普通の人を演じる。周りから浮かないように周りに合わせる。そればかりを意識して生活した。

そんなある日の休み時間。机に肘をつき、窓の外を眺めていた。すると、いきなりハイチューが一粒、私の目の前に飛んできた。ハイチューが来た方向を確認すると、隣の席のあなたが私を見ていた。

「それ欲しそうにしてたからあげる」

「え、あ、ありがとう」

これが私とあなたとの初めての会話。別に欲しそうにしていたつもりはない。でも、なんだか心が温かくなる。その日から少しずつあなたと話すようになった。そして、私とあなたが仲良くなるのに、そう時間はかからなかった。あなたは話すのが上手で、たくさん私を笑わせてくれる。私と話すのが楽しいと言ってくれる。私は、なぜかあなたの前でだけは素の自分が出せた。

しかし、あなたと別れて家に帰ると、急に不安が襲ってくる。私と話していてあなたは本当に楽しいのだろうか。私の素をあなたは気持ちわるいと思ってるんじゃないか。あなたは

本当は私のことが嫌いなんじゃないか。これからあなたに嫌われたらどうしよう。毎日毎日こんなことを考えて泣いてしまう。これをあなたに伝えたら嫌われてしまうかもしれない。そうして私は、あなたと距離を置こうとした。嫌われてしまう前に。

しかし、あなたにはばれていたらしい。

「最近元気ないけど何かあった？」

あなたからの一言。私の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。その瞬間、我慢していた涙たちが次々とあふれた。怖かった。本当のことを言ったらあなたは私を嫌いになるかもしれない。私はさらに泣いた。

「どうしたの？　ゆっくりでいいから話せるようになったら話聞かせて。」

あなたの優しい声。あなたなら信じてみてもいいのかな。話してみようかな。でも嫌われたらどうしよう。そんな葛藤が一時間ほど続いた。その間、あなたは何も言わずただ背中をさすってくれていた。優しい目で私を見つめて待っていてくれた。あなたを信じてみよう。上がっている息をなんとか整え、あなたに聞いた。

「なんで私と仲良くしてくれるの？　私のどこが気に入ってくれたの？」

あなたは一瞬戸惑っているようにも見えたが、優しい声で答えてくれた。

「他の人と考え方が違うところ。話してると毎回新しい考え方に出会えて、面白いし素敵だなって思ってる。」

意味が分からなかった。私はこの言葉を理解するまでにとても時間がかかった。他人と違うことを私の長所だと褒めてくれた。他人と違うことは素敵なこと。私は初めて、私という存在を肯定してくれる人に出会えた気がした。私はこの日、少しだけ自分を好きになれた。

あなたの一言で私の世界は明るくなった。私と出会ってくれてありがとう。

〈高校生の部　優秀賞・福井新聞社賞〉

微熱を感じて

宮城県仙台第三高等学校　熊谷　孝太

「こんばんは　定期便を窓口に出して参りました　お楽しみに」

「届いた！　今から開封の儀　けどその前に絵葉書が綺麗すぎて感動　そして私からもあなたに　明日の夜なにか届くはず」

「届きましたわ　かわええなあ　飾っておきます」

中学時代の同級生と交わされる、手紙のやりとり。いつからか「定期便」として、私たちをつなぐ大切なものとなっていた。

私は人とかかわりをもつことが苦手だ。とりわけ春のクラス替えのシーズン。別に誰かからいじめられているわけでもない。知らない人に囲まれて、自分を表現していく。それができたらどれほど毎日が楽しいのだろう。朝は学校のトイレに籠もって時をやり過ごすこともある。本当に腹痛に襲われる。小さいころはこんなことも無かったのに。

ある日。学校で精神的に疲れていた春だった。マンションの自動ドアを抜けて、ポストに手をのばす。中にはちょこんと小さなハガキ。かわいらしい切手と懐かしい丸文字。定期便だ！　一気に心が緩んでいき、じんとあたたかくなっていくのを感じる瞬間だった。それは微熱のようであった。この微熱が大好きだ。

手紙を送りあうかつての同級生とは、スマートフォンでもやり取りする。中学時代の思い出話に花を咲かせたり、近況を話しあったり。内容は様々。とても楽しい時間である。けれどここに微熱は存在しない。無機質。早い。どこか業務的だ。卒業アルバムの寄せ書き、教室で見せてもらった理科のプリントのあのペンの丸文字のあの手は、ここには見えない。

定期便どうもありがとう、という会話はデジタルでも行うが何かが足りない。その気持ちを埋めるように、私も定期便を送るようになっていた。便箋、ハガキはどうしよう。ボールペンで書こうか、いやいつものシャーペンでいいか。切手、そういえばかわいいのが貼られていたな……。定期便を書いているその瞬間は、どこを切り抜いても送り先に思いを寄せている時間である。その時間がいかに濃いもので、かけがえのないものであるだろうかということを定期便を通して考えるようになった。決して手紙を書いている時間だけではない。昨日投函した手紙、そろそろ着いたかな、なんていう時間もデジタル時代だからこそ重みを感じる。そのうえ、儚く、甘美な時を過ごしているように感じて心に微熱が生まれるのだ。

また別の日のこと。ポストを覗くと小さな封筒があった。それはラジオ局からのものであった。毎日ラジオを聞くことを趣味としている私は、よく番組宛てにメッセージを送ったりするのだが、プレゼントに応募した記憶はなくただ驚いたのを覚えている。早速封を解くと、中にはパーソナリティの方のサイン入りの番組ステッカーと、メッセージの内容について触れられたコメントが中にあった。自分が送ったメッセージに対して、こんなにも丁寧に返信してくれるなんて。嬉しくて嬉しくて、心震えた。

私はラジオを通じた人との関わりも、定期便と同様に微熱を感じる。番組で紹介される数々のメッセージ。その内容にくすっと笑わされ、時には考えさせられる。これを投稿した人、どんな人なんだろう、そう思いを寄せることはかなりある。このラジオネーム聞き覚えがある、となればなおさらだ。もちろん番組を展開していくパーソナリティも気になる存在だ。ネットで調べれば顔は分かる。調べたこともある。けれど、目を閉じて音だけを聞いて、あれこれ想像を巡らせるというのは、乙であり魅力的だ。

どうやら人付き合いが苦手な私も、この微熱を伴う人との関わりは好んでいるらしい。この微熱ってなんだろう。それは相手に思いを寄せる時間ではないだろうか。スマートフォンでのやり取りは、どこかこの感覚が希薄だ。逆に対面でのやり取りの場合、相手のことを考えすぎてしまい、何もできなくなってしまうことが多い。過剰に捉えてしまうのだ。修学旅行の夜に、ベッドの上で部屋を暗くして相手の顔も見えにくい状態でコソコソ話を楽しむような、そんなに気負わずにコミュニケーションを楽しむ気持ちを大切にしていきたい。

定期便を交わす相手とは、友人をこえた何かを感じる。離れていてもお互いのことを考える時間をもっているということは、とても素敵なことのように思える。私が今、いちばん大切にしたい時間だ。

そんな私の将来の夢は、大好きなラジオをはじめとするメディアに関係する職に就くこと。今は不安も恐れもたくさんある。それでもこの微熱を多くの人に知ってもらえるように、日々微熱を糧に生きていく。

〈高校生の部　優秀賞・福井仁愛学園賞〉

幸せな日常

福井県立武生商工高等学校　　西　陽向

新型コロナウイルスが流行して三年、母と弟がコロナに感染した。最初に弟が学校で広まっていたものをもらって来たようで、咳をして熱を出した。そして、ほんの二日後にその弟から母が染されてしまった。母と弟が二人でＰＣＲ検査を受けに行き、「陽性」と判断された時、『ああ、ついにか。』と皆が肩を落とした。母は、

「心のどっかではインフルエンザかも、とか思ってたんやけどなあ」

と笑いながら言っていたが、やはり結構落ち込んだ様子だった。

母子家庭で母、私、弟の三人暮らしのため、コロナに罹っていない私が炊事掃除などの家事をした。毎日のごはんを考えるのはとても大変で、数日経つともう同じメニューしか思いつかなくて、母に、

「あんた炒め物好きやなあ」

と静かに言われてしまった。母の凄さと有難さを心から思い知った時だった。母は、体調が良い時は無言で一緒に洗濯物を干したり、掃除をしたりしてくれていたけれど、熱が上がったり下がったりと繰り返す中で、

「やっぱりつらくなってきたわ。休むね」

と言う時は本当に心配で、こんな状態でも母は家事をしてくれるんだ、という感謝と尊敬と、申し訳ない気持ちの一方で、『こんな時ぐらいずっと休んでいればいいのに。いつも仕事と家事を両立してくれてるんだから、ちゃんと休んでいてよ。』なんていう責めるような気持ちも出て来ることもあった。朝昼晩の食事も同じ空間ではあったものの、絶対に一言も発さずに個々で黙々と食べ進めた。そんな中でも一番苦しかったのは、ずっと家の中を取り巻いている暗い空気だった。コロナ一つでこんなに居心地が悪くなるものなのかと正直恐ろしく思った。

この一週間は本当に長く感じた。そして、自粛が明けた最初の日。家族三人が、『やっとか。』という思いだった。母が仕事場から送られた抗原検査キットで検査をした。家族三人で不安な気持ちを抱えながら、緊張してキットを見守った。

うっすらした線が、一本、ゆっくりと浮き出て来た。「陰性」、その結果を見た瞬間の喜びと安堵感は、とてつもないものだったことを一ヶ月経った今でもよく覚えている。

「よかったあ」
母は心の底から安堵の声を上げると、着けていたマスクを思いっきり外し、
「もうマスク外していいよね？」
と、とびきりの笑顔で言った。『それは外す前に言う言葉じゃん。』と内心突っ込みを入れながらも、私も嬉しくて、
「うん！」
と笑顔で答えてマスクを外した。
その日の夕食はとても賑やかで、母と弟がコロナに罹る以前より会話が弾んでいた。
「うまいなぁ、うまいなぁ」
と言って食べたピーマンの肉詰めは、いつもと何も変わらないものだったけれど、本当にとても美味しくて、縦五センチ程度のミニミニピーマンといえど三人で四十個程も食べてしまった。母と、
「やべえなうちら！」
と言ってばくばく食べた。昔から小食でこの日も一番食べる量が少なかった弟に、
「うん、まじでお母さんとお姉ちゃんやばいと思う。」
と少し引き気味に言われてしまった。
「あんたもっと食べねや」
と、母と私に同時に言われた弟が、それからしぶしぶと一個だけ取って食べているのを見て思わず笑ってしまった。
コロナのお陰で普段の何気ない日常の有難みを知ることができた。食事中に小さな事からけんかになり、せっかく母が作ってくれた美味しいごはんが味気なく感じること、冬にはストーブの前に三人がぎゅうぎゅうになって、『もう、狭い！』と思うこと、いろいろある。しかし、それらも全てひっくるめて、幸せな日常だなと今なら心から感じる。「陰性」の判断が出た母が、
「やっと娘にくっつけるわぁ！」
とにっこにこの笑顔でぎゅうっと抱きついてきた時、高校三年の私は正直恥ずかしかったけれど、その時ばかりは嬉しさの方が勝った。
コロナで家族や知人が亡くなってしまった人、後遺症に苦しんでいる人など、つらい思いをしている人が沢山いると思う。その苦しみは私が想像してもしきれないものだろう。その人達のために私に出来ることというのがほとんど無い。それが本当に悲しい。だから、このコロナ禍の中で生きる、より多くの人々が何気ない普段の日常の有難さに気付きますように。より多くの人々が、これからもこんな、幸せな日常がいつまでも続きますように。私はそれを、今心から願う。

〈高校生の部　優秀賞・実行委員会賞〉

私の武器

仁愛女子高等学校　谷口　小優子

「外であんまり話しかけんといて。あんたしつこいんやって。」

私が弟に言う。弟は黙ったままだった。ただ目の前の弁当をほおばっている。食べ物を前にしている弟に言うのは無駄であると理解していながら私はもう一度くり返した。弟はプラダーウィリー症候群だった。何度言っても弟が私の言葉を理解し、その通りにすることはできないと分かっていながら、三回目を言った。弟はＩＱ三十三であった。

私と弟は一歳差で、幼い頃から一緒にいた。そのため彼やその隣にいる私に向けられる視線の意味はよく知っていた。私はその視線に反抗したり、

「外には悪い人がいっぱいいる。嫌な目に遭いやすいからあんまりどこでも行くのはやめときなよ」

と弟に教えたりして視線から守っていた。

弟は特別支援学校に入学したため、小学校から私たちは別々になった。そのため弟の存在を知る人は少なかった。だから私は友達に、

「弟か妹か、いるの」

と聞かれた時、はっきりと、

「弟がいる」

と答えたことはなかった。彼のことを話して変な弟だとか障害をばかにされるのが嫌で、当時私は彼を守るために存在を隠していた。

中学生になってもそれは続いた。私が、友達と遊ぶために公園に行こうとするとついてこようとするのでその度に別の所で遊ぶように言ったり、彼に隠れて家を出たりした。これから友達と会うのに足は重かった。

数年たち、私が中学三年生の二月、彼はパニックをおこして自傷したため保護入院という措置がとられた。自分の腕の肉を噛みちぎったのだという。家に警察官が来て弟が保護された後も私は自分の部屋から出られなかった。弟が怖かった。

それから約一か月後、入院する彼の荷物を届けるために母と私は病院へ行った。やって来た看護師から、最近は家に帰りたいという理由で怒っている、と聞いた。私は、弟のことだからきっと家にいる方が食べ物がたくさんあって、好きな時に食べられるからという理由

で帰りたいと言っているのだろうと思った。だから次に看護師が寂しいんだろうねと言った時、あぁ分かっていないな、と思った。これまで彼の生活は食が中心で、私たち家族のことなんてなんとも思っていないようだった。バイキングに行けば全種類食べるまで帰らないのだと怒り、誰かが急いでいたとしてもゆっくりご飯を食べきることを譲らなかった。だからその直後看護師から四羽の鶴を受け取った時、息が止まりそうになった。弟からあずかったのだと言う。四羽はそれぞれ父母、妹、私を表しているそうだ。

私はもう、ただ辛かった。ずっと心の中に溜まっていくもやもやした苦しさは自分へのいらつきだと、本当は気づいていたように思えた。そうしたうえで私は彼を偏った目で見ていた。私が一番嫌いだったのはそんな自分の目だったのかもしれない。向けられる視線やかわいそうだという声から私が守っていたのは弟ではなく自分自身だった。いつの間にか、障がいをもつ彼を自分の武器にしていた。障がい者である前に彼は私の弟であるのに。

半年後、入院中の弟と面会できると母から聞いた。コロナ渦のため会えるのは一人だ。

「私が行く」

面会に向かう足は軽かった。病院へ向かいながら考える。話に聞いていた石川県の施設の見学に行ってみようと思った。食べ物の制限がきつい中でも好きな物を少しは、食べさせてあげたいなと思った。

「病院のご飯、おいしいか」

半年ぶりの会話だった。

「うん。うまい」

弟が幸せそうに答える。面会室の机越しに向かい合っていた。はじめて弟と向きあえた。そんな気がした。

〈高校生の部　優秀賞・実行委員会賞〉

メモ用紙の折り鶴

市立札幌開成中等教育学校　竹中　ひかる

頬にぽつりと雫が触れる。雨だ、と思い手を広げた数秒後、私たちはびしょびしょになっていた。いわゆる、スコールと呼ばれるものだ。駆け足で屋根の下に飛び込む。こっちに来てスコールにはずいぶん降られたけれど、やっぱりまだ慣れない。

一週間前、私はネパールに降り立った。空港から出た瞬間に感じた異国の雰囲気と、バイクや車が行き交う街の騒々しさは、今でも鮮明に思い返せる。信号はなく、車やバイクの間を縫うように歩行者が通り抜けていく。クラクションが音楽を奏でているかのごとく鳴り続けていた。

なぜ私がこんな異国の地にいるのかというと、ボランティアを行う留学プログラムに参加するためだった。夏休みの二週間だけではあるけれど、せっかくの留学なのだから、旅行なら行けないところにと思い、ネパールを選んだ。

当分、雨は降り止まなさそうだ。視線を感じて隣を見ると、ピンクのかわいらしいワンピースを着た女の子、そのお母さんらしき女の人。やっぱり彼女たちも急なスコールに降られて、私たちと同じように雨宿りをしているのだろう。

「どこからきたの？」

女の子が少し恥ずかしそうな表情で私に話しかける。ネパールの公用語はネパール語。彼女が学校で習ったばかりの英語を使ってくれたのだと思うと嬉しくなった。

「日本だよ」

表情の変わらない彼女に、お母さんが耳打ちする。なるべくはっきりと発音したつもりだったけれど、まだまだ力不足だったらしい。

私も小学生くらいの子と盛り上がれるほどの英語力はなく、しばらく無言の時間が続く。私は、数日前に訪れたネパールの幼稚園を思い出していた。

幼稚園を訪れたのは、歯磨きのやり方を教えるためだった。幼稚園に入ると、子どもたちが並んで座っていた。制服なのだろうか、青色と赤色と黄色のカラフルな洋服をみんな着ていた。私たちに手を振ってくれるところは、日本の子どもたちと変わらず愛らしかった。

新品の歯ブラシと歯磨き粉を渡していく。そしてみんなで歯磨きを始めた。歯磨きは、円を描くように、ぐるぐると磨く。

「歯磨きは一回何分？」
「二分！」
「じゃあ一日には何回やればいいの？」
「二回！」
みんな私たちが出す問題に元気に答えながら、歯磨きをしていく。
歯磨きが終わったら、子どもたちは、うがいをしに違う部屋に向かった。ネパールでは水道水が飲めないので、ミネラルウォーターでうがいをする。日本みたいなきれいな洗面台もない。下水も整っていないので、トイレでもトイレットペーパーさえ流せない。住む国が違うだけで、こんなにも衛生面が変わってしまうものなのだと、強く思わされた。
私はふと思いつき、リュックからメモ帳を取り出した。メモ用紙を一枚ちぎる。それを折って正方形にし、さらに半分に折って、開いて、また折って。完成したのは、小さな折り鶴。本当は、ホテルにあるはずのかわいいデザインの折り紙で作りたかったけれど。
「どうぞ。折り紙だよ」
女の子はおそるおそる折り鶴を手に取る。
「ありがとう」
そう言ってちょっと恥ずかしそうにお母さんに見せる。
たぶん、ネパールでは折り紙は有名ではないのだと思う。でも、将来この子が大きくなった時に、そういえば昔もらったのって日本の折り鶴だったんだな、って思ってもらえたら嬉しい。女の子の笑顔を見て、私も自然と笑顔になる。
そういえば、幼稚園で会った子どもたちも、この女の子も、みんな日本の子どもたちと変わらないようなかわいらしい笑顔で、私と話してくれた。この子たちにも、もっと衛生環境が整った、健康な暮らしをしてほしい。それなら、将来、発展途上国のためになるような仕事がしてみたい。私の将来の夢が、ちょっとだけできていく。
雨はまだやまない。女の子とお母さんは少しお話した末、帰ることにしたらしい。私に手を振って、雨の中を駆けていく。私は、振りはじめよりも晴れやかな気持ちで、その背中を見送った。いつかまた、会えますように。

〈高校生の部　佳作〉

祖父と池田

福井県立藤島高等学校　松田　珠希

福井から池田町に入り、赤いスノーシェイドを抜けると、称名寺が右手に見える。そこには、曾祖父母のお墓がある。その先を右に向かうと「能面の里」や「アドベンチャーパーク」ができた。反対に、左に向かうと足羽川沿いに、数年後にはダムに沈む祖父の故郷がある。私が生まれる二年前の洪水を機にダム建設が決定したのだ。そこは、一度も携帯の電波が届いたことがない、秘境のような場所だ。祖父の家はすでに取り壊されていたが、小学生の頃は夏休みに家族でＢＢＱをしていた。特に川で取れたヤマメの塩焼きは最高だった。目の前を流れる足羽川はとても冷たくて五秒も足をつけていられない。雨の後は特に流れが急でゴーゴーと音を立て、吸い込まれそうになる。周りはほとんど植林された杉の木だらけだが、祖父の家の跡地には大きな大きな樫の木がまるでトトロの里のようにそびえていた。樫の木の下はちょうど足羽川からの風が吹き抜けて、暑さをしのげた。夜には蛍が洪水前の半分ほど帰ってきていた。母が昔植えたカリンや梨がたまに渋い実をつけていた。裏の神社には曾祖父の植えた「よつじ桜」があり、春には低い位置で花が満開になる。幼い頃の私が大好きな桜の木だった。池田は私にとって、ジブリアニメの中にある異界のような特別な場所だったのだ。

それに加えて、祖父の池田のエピソードはいつも面白すぎる。祖父が二年生の時、子熊に膝を噛まれた嘘みたいな本当の話。隣の家が猟師で、母熊を撃ってしまったため子熊は家の外で犬の首輪をされて飼われていたらしい。面白がって祖父は餌を与えようとして噛まれたらしい。ズボンをまくり上げて小さな傷をメガネを外したり、かけたりしながら探してくれる。傷が小さすぎて私や弟は何度も膝がしらを覗き込んだ。いつまで飼われていたのかと聞くと、祖父の知らぬ間に首輪を噛みちぎって逃げたらしい。他にも修学旅行から帰ってきたら同級生の家が流されて無くなったが祖父の家は大丈夫だった話や昭和三十八年の福井の記録的な豪雪で周りは三メートル以上雪が積もっており、高校受験のために福井に三日前から滞在した話、同級生の間では「池田の出世頭」と呼ばれていること、炭焼きをしたことはないが炭焼き小屋で炭を焼きながら暮らしたいなどと言う話がある。いつだって池田のイメージは神秘的な自然豊かな世界と、夢いっぱいの祖父の思い出でできていた。

今年になり、ダムの建設が佳境を迎え、祖父の家の跡を訪れることができなくなるのも時

間の問題だった。夏のある日、祖父と祖母、弟と私は焼肉を食べた後、ドライブがてらふらっとそこをおとずれた。思い出の場所はすっかり様変わりしていた。そこにはもうあの大きな大きな樫の木はなかった。樫の木が切られてしまって祖父の家の場所は正確に分からなくなった。ショベルカーやダンプカーがあちらこちらを均してしまった。もうジブリアニメのような異界と私が住む世界との境界線は、壊されてしまっていた。ダムに沈む時、私はもっと自然豊かな祖父の故郷のまま水の中に沈む姿を想像していた。しかし現実は木も建物もなくなって無機質に均されていた。「もう、池田には来ない」と寂しそうに祖父はその場を離れた。

先日、福井で同窓会が開かれたらしい。ダムに沈んでしまう故郷を忍んで石碑を建てようという意見が出たらしい。しかし誰が管理するのかや費用の話がこじれ、結局流れてしまったらしい。今日も祖父は誰よりも仕事が忙しい。池田のあの場所で夢見た仕事を今日もこなしている。そんな祖父がちょっと羨ましくて私も祖父の仕事を学んでみてもいいかなと今、進路希望調査書とにらめっこしている。

〈高校生の部　佳作〉

人生レシピ

福井県立大野高等学校　牧野　芙南

パラレルワールドの「私」はどんな「私」だろうか。

あの頃の私は、料理なんて面倒で嫌いなことだと思っていた。中学生までは、「得意料理は何ですか。」と聞かれたら、「カップラーメンです。」と答えるほど、料理に対して苦手意識を持っていた。それが今では、「趣味は何ですか。」と聞かれたら、「料理です。」と答えるほど私にとって料理は大好きなことになった。

なぜ料理が好きになったのだろうか。あれほど苦手で嫌だった料理を始めるきっかけを与えてくれたのは、高校生になる私だ。私は大学生になったら一人暮らしがしたい。そのためには、家事が人並程度にはできるようにならなくてはいけない。その一歩として、高校生活のお弁当を自分で作り始めた。最初は、レシピを何度も読み確認しながら、おぼつかない手でなんとか作っていた。時間がかかってしまうことに口惜しく感じることもあった。しかし今では、「何が食べたいか」とレシピをインターネットでわくわくしながら探して、食べたいものが見つかったら「これを作りたい！」と料理を楽しみにするようになった。何が理由でというよりは、いつのまにか好きになっていたのほうが正しいのかもしれない。

料理が好きになったからと言って、得意になったわけではない。包丁さばきなど苦手なことはまだまだあるけれど、時間がかかってしまったこととか少しこげてしまったこととか、失敗したことさえも楽しいと感じるようになった。これは、「お弁当作りを始める」というきっかけが与えてくれた変化だ。

「人生とは実験である。実験を重ねれば重ねるほどに、より良い人生となっていく。」これは、アメリカの思想家エマーソンの言葉だ。私にとって料理とは「実験」で、調味料の配分を間違えれば当然失敗する。その失敗を繰り返せば繰り返すほど、より上手になっていく。それは料理だけではない。私の「人生」も「実験」である。何かがきっかけとなって化学反応をおこし私の「人生」を調味料のように味付けしてくれるスパイスとなるのだ。しかし何がスパイスとなるかなんてわからない。実際、私もこんなに料理が好きになるとは思っていなかったのだから。だからこそ、「実験」をたくさん重ねるべきなのだ。

「食べず嫌い」という言葉があるが、自分でも私は「やらず嫌い」な性格だと思う。料理がそうだった。しかし、「お弁当作りを始める」というきっかけが私を一八〇度変えてくれ

た。嫌いから好きへと。

パラレルワールドとは、ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界のことを意味する。簡単に言ってしまえば、この世界とは別の世界だ。つまりパラレルワールドの「私」は嫌いなスポーツが好きで、苦手なあの子とは仲が良いのかもしれない。だとすれば、この世界の私はスポーツを好きになることやあの子と仲良くなることはないのだろうか。いや、そんなことはない。私の料理への意識が嫌いから好きへと変わったように、考え方だって一八〇度変わることがある。だからパラレルワールドを上手く説明することはできない。しかしこれだけは言える。考え方が一八〇度変わるには、「実験」を繰り返すことが必要だ。もちろん失敗もたくさんしてあたりまえなのだ。そもそも「実験」とは失敗の結果を次へ生かすためのものなのだから。私はそんな「人生」を歩みたい。

私の人生設計図、「人生レシピ」を紹介する。そうは言っても、将来の夢なんてまだ的確にあるわけではなくて、自立してなんとか生きていければいいというくらいにしか考えていないのだが。しかし私はそれで良いと思う。何がきっかけで、考え方が変わるかなんて今の私にも別世界の「私」にもわかるわけがないのだから、将来の選択は未来の私に任せて、今の私はこの世界でできる「実験」を最大限に挑戦していけば良いのではないだろうか。その中の一つがもしかしたら大発明で革命をおこすのかもしれないのだから。今の私の「人生レシピ」には、一言で「実験してみる。」と書かれているに違いない。

今の世界は実力主義的な一面があるから、結果だけが求められるときもあるかもしれない。そんな世界に生まれた私は、日々「もし失敗してしまったら」という不安を心のどこかでかかえている。「実験」することもおそれてしまいがちだ。しかしそれではいけない。私は、自分の「人生レシピ」のほこりを払って読めるところを増やしていくのだ。そして新たな調味料を加え自分で創り出すのだ。なぜなら、味をつけるのはいつだって『私』自身なのだから。

〈高校生の部　佳作〉

にっころがし

福井県立勝山高等学校　平瀬　咲弥

「美大なんて無理やわ」
おばあちゃんが持ってきてくれた里芋の煮っころがしの小さいものだけ器に盛る。
おばあちゃんはよく家に色々持ってきてくれる。今日も銭湯に行くついでだと家に寄り、いかに上手に芋が煮れたかを自慢していた。
部活で汚した体操服を見ておばあちゃんは、
「美術の大学に行くんか。さぁちゃんは絵が上手やからなあ」と言った。
「そんなん行かせるお金ないわ」
と大きい里芋を私の器に一つ乗せながら、おかんに突っ込まれる。
言われなくても行かないし、行く気もない。そもそも私は絵を描くのがあまり好きではなかった。
「まあ、趣味で細々やってくつもり」口にほおりこんだ里芋は、野菜の自覚があるのかってほど甘く、小さかった。
この場所が好きだった。喋って、遊んで、たまに描いて。そんなゆるい部活が心地よかった。でも現実は違った。
井の中の蛙を見た。カエルは私だ。家、保育園、小学校、学童、中学校。上手だ上手だと褒められ天狗になっていた。私には才能があると本気で信じていた訳ではない。だが人並み、人よりは芸術に秀でている自負はあった。
それがポッキリ折られてしまったのだ。ここは化け物だらけだった。後輩も、同期も。
ただうまいだけじゃない。情熱があった。絵がすきだ。という単純で真っ直ぐな情熱。そんな人たちの中で、実は自分は大した人間じゃないんじゃないか、そう思ってしまう事が怖くて、目を背け言い訳をした。ただ褒められるから、と続けていた絵だったから。
でも、本当はそんな事ばかり言って〝本気〟から逃げている自分も好きじゃなかった。私も〝本気〟でぶつかってみたかった。
「くそっ。」
大きなキャンバスを引っ張り出した。F50号。ここで描ける最大のキャンバス。なんだか無性に腹が立って夢中で描いた。高校最後の作品なんだ。下手だっていい。私がここの学校で

ここの部活に居た意味を残したい。「私だって」プライドくらいは、ある。
何度も何度もペインティングナイフで削っては絵の具を盛った。どうすればいい？　わからない。ここに来て私はなにも成長していない。そんなことに今更気づくのか。背に腹は代えられない。隣でうんうん唸っている同期に私は声をかけた。
「すまん、アドバイス、求む。辛口で。」
普段話し始めたらうるさがって聞かないくせに、と彼は目をぱちくりさせた。約三十分のアドバイス。だから嫌なんだ。でも、うん。なにか見えた気がする。
描いたのは畑で満面の笑みを浮かべる私の祖父。
「ここの茄子はなあ、もう少ししたらおっきくなって、食べられるぞお」
そんな声が聞こえてくるような、思わずつられて笑ってしまうようなそんな絵。頬の膨らみ、目元に刻まれた深い皺。笠からきらきらとこぼれ落ちる初夏の日差し。締切のぎりぎりまで描いた。楽しかった。
もっと描いておけばよかった。そう思った。時間はあったはずなのに。いつも気づくのは最後だ。
「まじか。」目を疑った。顧問からの連絡で入賞が告げられた。二つの薄青の細い紙は別の高校からの推薦らしかった。
「どこに飾ってあるんかなあんたの絵」
あら、きれいな絵、とおかんが歩きながら感嘆の声を上げる。
「さあ、端っこなんじゃない？」
興味の無い風に答えたが、心の中は違った。レベルの高い作品たちに正直気後れしていた。
「あ、いたわ。」しかし祖父は意外とあっけなく見つかった。前と変わらない絵のはずなのにその笑顔はどことなく照れくさそうだ。
改めて見ると、ひどい。デッサンは狂っているし。ところどころ粗雑でまだまだだ。改善点が山のようにある。もう早く家に帰りたいと身体がうずうずしていた。でも何故か心はすっきりしていた。
帰りの車の中、雲の隙間から光が帯のようにさしていた。
おばあちゃん。私、美大は目指さない。でも、私、絵が好きだよ。
「おかん寄ってほしい所あるんやけど」
小さなキャンバス。ここに何を描こう。やりたい事は山程ある。ひとまず、そうだ、おばあちゃんの煮っころがしを描こう。

〈高校生の部　佳作〉

お弁当

仁愛女子高等学校　藤沢　茉莉

四限目が終わり、手を洗った後、私はドキドキしながら弁当箱のふたを開ける。高校に入学してから約一年半、ほぼ毎日お弁当を食べているが、いまだにふたを開けるのはドキドキする。なぜならお弁当にはいつも母からのメッセージが込められているからだ。

私が入学してから今までの毎日のお弁当を作ってくれているのは母だ。中学校を卒業してすぐは、私がお弁当を作るよ、とか、お弁当は交代で作ろうね、などと母に自信ありげに言っていた私だが、高校に入学してそんなことは到底無理だと気づいた。部活から帰った後、食事をしたり課題をしたりしていると、あっというまに夜遅くなってしまい、そのまま寝てしまう日々が続いていた。母は「あんなに張りきっていたのに。」と私に呆れながらも、毎日欠かさずお弁当を用意してくれている。

私が母からのメッセージに気づいたのは、入学して一ヶ月ほど経った頃だ。その日のお弁当は卵焼き、ウインナー、ポテトサラダ、トマトが入っていて、おまけに梅のふりかけがついていた。全部私の好きなものだ。母はお弁当を作るとき、いつも色々なことに気を遣ってくれている。彩りや栄養面でのバランスを考えたり、毎日同じようなメニューにならないようにしてくれたりしていた。そのことに気づいていたから、その日のお弁当のメニューはとても不思議に思えた。いつもより私の苦手な野菜が少なく、好きなものばっかりだったから。帰ってすぐ、母にそのことについて聞くと、母はなんとなくだよ、と答えた。私がその答えに納得できず問いつめると、本当は学校が少しでも楽しくなるように作った、と照れながら言った。そのお弁当を作る前の日、私はぼそっと「学校行きたくないなぁ」とこぼしたらしい。覚えてはいないが心当たりはある。私が言ったのは、苦手な教科があるから、とか課題が終わっていないからとかが理由の「学校行きたくないなぁ」だったのだが、母は深刻に受け取ってしまったらしい。私が少しでも楽しんで学校を過ごせるように私の好きなものばかりつめてくれたのだという。それはまさに母から私への「ガンバレ」のメッセージだ。私は気づいた時には母と同じような照れ笑いと共にありがとう、とつぶやいていた。

弁当箱を開けるのが楽しみになったのはそれからだ。毎日ワクワクしながらふたを開け、母の気持ちを考えるのだ。弁当が野菜ばかりの日は母とけんかした次の日だ。テストが終わった次の日はデザートの果物がとても豪華だった。弁当を食べている間はずっと母のこと

を考えて、帰ったら報告し、母と一緒に答え合わせをする。いつのまにかそれが日課になっていた。いわゆる反抗期まっただなかだった私と母を繋ぎ、心を近づけてくれたのは、あのお弁当の影響が大きいと勝手に思っている。大げさだと思われるかもしれないが、少なくとも母のお弁当のおかげで私の学校生活は少しだけ前より彩られたのは事実だ。これからの人生でお弁当を作る機会はどれだけあるだろうか。食べる人の日常が少しでも華やぐようなお弁当を私も作ってみたい。